

いちのせき

農委だより

第16号

2011

7



被災した須川パイロット地区の水田（滝沢字木ノ川地内）

東日本大震災からの
復旧・復興に向けて

平成23年3月11日、4月7日は、忘れられない日となりました。3月11日、14時46分に発生した巨大地震は、三陸沖を震源とし地震の規模マグニチュード9.0、最大震度は栗原市で7、一関市では6弱を記録し、停電、断水が発生し市内の住家や道路・公共施設、農地・農業用施設に甚大な被害をもたらしました。

さらに4月7日、23時32分に発生した余震は、宮城県沖を震源としマグニチュード7.1、震度6弱を記録し、本震に匹敵する揺れは、本震以上に市内の住家に被害を与え、道路の陥没や農地・農業施設の崩壊やパイプラインの破損など大きな被害を与えました。

農業関係の被害状況（7月6日現在）は、農地関係では、田、1064カ所・175.2ha、畑、69カ所・3.2ha、牧草地17カ所・5.1haで被害額計6億7千3百万円、農業用施設関係では、ため池304カ所、頭首工12カ所、水路（パイプライン含む）659カ所、揚水機場7カ所、農道217カ所、橋梁1カ所、農地保全施設1カ所、農業集落排水管路38カ所、被害額計14億7千3百万円となっています。

特に須川パイロット地区においては、小間木揚水機場からの本管をはじめ273カ所でパイプラインが破損し復旧に多くの時間を要し、全域の通水は6月2日となりましたが幸い田植えには間に合いました。

しかし亀裂や崩落した水田は296カ所におよび今年の水稲の作付を諦めた水田は24haに及んでいます。

水田（写真）が被災した菅原せい子さん（滝沢字木ノ川）は、「大変な地震で特に余震の方が被害が大きかった。岩手・宮城内陸地震の時とはなんとか自力で復旧したが、今回は農地災害復旧事業で復旧したいと考えているが受益者負担金が幾らになるかわからず、支払についても不安である。」と今後の不安を語っていました。

今後、災害査定を経て復旧工事が行われますが農業者の生産意欲が失われないよう早期の復旧・復興と負担軽減が求められます。

農業復興支援を 市長へ緊急要望

7月6日、千葉哲男会長、千葉県会長職務代理人、伊藤公夫農政専門委員長、畠山比佐夫同副委員長が市役所を訪問し、会長から市長へ「東日本大震災等に係る農業施策に関する緊急要望書」を提出し、農業関係の復旧・復興と安定経営に向けて支援を要望しました。



要望書は次の5項目からなります。

- 1、農地・農業用施設の災害復旧事業の早期着工、受益者負担の軽減
- 2、老朽化した農業用施設の抜本改修への支援、特に揚排水機場パイプライン、ため池への早期復旧・改修への対応
- 3、被災農家の経営再建に向けた資金借入や償還利子に対する支援の強化
- 4、福島第一原子力発電所事故による放射能に関する的確な情報収集と提供、風評被害防止対策、放射能被害に対する対策と国等

へ早期の補償支払への要望
5、6月23日からの豪雨による冠水被害への対応と営農指導対策等の支援

市長は、農地・農業用施設について、農業者が意欲低下しないように復旧を急ぐ、老朽化した施設の調査等を要望していくとし、原発事故による放射能問題については、県に対し厚みのある調査の実施を、国に対しては補償基準を示して早期に補償を行うように要望するとし、要望事項をしっかりと受けとめ対処していくと理解を示しました。

地域環境を守る 舞川地域遊美保全隊

舞川地区（1区～9区）では、「舞川地域遊美保全隊」（会長 舞草 颯）を組織し平成19年から農地・水・環境保全向上対策（2千200円/10a）を活用し第三遊水地内（140ha）の環境保全活動として、舞草川の草刈や農道への敷砂利、排水路整備などを行っています。

6月26日には、1区～3区全戸が参加して舞草川の草刈作業を行いました。

舞草川は平成14年度に基盤整備事業完了以降は、草刈等が行われないまま放置され、柳の木が茂るような状態となり、見かねた農家組合や区長などが、同交付金を活用した環境保全活動を地域を挙げて行うために遊美保全隊を組織しました。初年度は抜根などに重機が必要でしたが、5年目を迎え草刈機でスムーズに作業が行えるようになり、民区ごとに担当範囲を決めて年に2回の刈り払いを行い、作業経費は各民区に交付され民区活動に役立っています。





**社会福祉法人 平成会が
耕作放棄地解消活動表彰を受賞**

舞草会長は「当時は道路から圃場が見えないくらい生い茂り大変な状況で、管理者である県や市に相談したが埒が明かず地域で行うことにした。大変な作業であったが、5年目を迎え地域に定着してきている。刈り払いされてきれいになり、子供たちが釣りをしたりするようになった。これからもきれいな景観を守っていききたい」と語っていました。

社会福祉法人平成会（小野寺毅理事長）は、全国農業会議所・全国農業新聞が実施する第3回耕作放棄地発生防止・解消活動表彰事業において全国農業新聞賞を受賞し、6月7日、岩手県農業会議の佐々木正勝会長らが同法人授産施設「ブナの木園」を訪問し受賞の伝達を行いました。

平成会は、障害者自立支援の環境として障害者就労継続A型「農業天国」に取組み、20年度に耕作放棄地再生利用推進事業（再生実証試験）により整備された農地4haを借用し、21年度からは耕作放棄地再生利用緊急対策事業を活用しさらに5.5haを再生させました。

昨年度からさつまいも、かぼちゃなどの栽培を開始し、さつまいもは干し芋に加工してイオンスーパーセンター一関店をはじめ東北地方のイオングループ各店で販売しており、現在、耕作面積は12haにおよび同施設で働く利用者は26名となっています。

岩手県農業会議の佐々木会長は「農業と福祉の連携を以前から考えていたが、平成会の事例は見事

にマッチングして耕作放棄地が解消された優良事例であり取組みに感謝する」と話し、平成会・小野寺理事長は「利用者の中では外での農作業は人気が高い。経営規模をさらに拡大し収益を倍増させて利用者に還元して経済的自立に向け支援を充実させていきたい」と抱負を語っていました。

退職後の新規就農

大東町中川の三浦政利さん

三浦さんは、平成20年3月に銀行を退職し新規就農を目指し、姉の50aの水稲栽培を手伝いながら当初、しいたけ栽培に取組み、ホダ木の切り出し植菌などを一人で600本を栽培しましたが、体力的に大変なことから、JAいわい東の新規営農募集説明会に参加し、姉が所有する農地の休耕地を活用して昨年から10aの小菊栽培を始めました。

栽培にあたり、JAいわい東小菊部会の伊藤登喜男さんの指導を



受ながら、8千本の苗木を植え付け、栽培マニュアルに沿って、手入れや消毒を続け、2万4千本余りを出荷しました。今年は栽培面積を15aに増やし、暑さの中除草や消毒に追われています。

三浦さんは「小菊栽培は初めてだったが、姉のところトラクターや管理機などの農機具が揃っていたことと、普及センターの栽培マニュアルや農協の小菊部会員の指導で不安なく栽培ができた。近隣には休耕地はまだあるので、私の栽培を見て、新たに取組む人が出てきて、この地区が小菊でいっぱいになってほしい」と語っていました。

農地を耕作してくれる農家を探している皆さまへ
耕作、農作業の受け手を仲介します。

一関市担い手育成総合支援協議会（一関市や農業委員会、農協等で構成）では、農業経営基盤強化促進法の規定に基づく農地利用集積円滑化団体の認定を受け、農地の所有者に代わって借受者を探す等の利用調整を行います。（遊水地一関第3地区は岩手南農協で取り扱います）

この制度を使って、農地の貸付等を希望する方は、市役所農政課、各地域の支所産業経済課、農業委員会事務局にお問い合わせください。

なお、申し込みを行えるのは、所有者に限られます。申し込みの際は、印鑑および免許証など本人を確認できる書類をご持参願います。

※この制度により、6年以上の期間のある利用権設定を受け面的集積を行った戸別所得補償制度加入業者は、規模拡大加算（2万円/10㍏）を受けることができます。

事業の概念図



新任農業委員さんご紹介

磐井農業共済組合の理事改選に伴い、同組合推薦の農業委員として、新しく一関地域の佐藤暢一氏が4月1日付けで就任されました。



佐藤 暢一 72才
入道 農政専門委員会
殿美町

退任された委員さん

小野寺 弘毅 氏

農業委員（磐井農業共済組合推薦）として、花泉町油島地区を担当され、2年間ご活躍いただき、当市の農業・農村の発展に寄与いただきました。

その御労苦に感謝申し上げます。

老後に備えて農業者年金へ
加入しましょう！

農業者年金は農業者だけが加入できる安心・安全な公的積立年金です。お問い合わせは農業委員会事務局まで 電話 21-8692

編集後記

東日本大震災により被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。

この災害で一瞬にして悲惨な生活に変わり御苦労されており、国内をはじめ世界各地から支援を受け復興に向けて着実に前進しておりますが、行政の支援が不可欠であります。岩手県内の農地被災面積は1,766haに及び大半は沿岸部ですが、一関市にも被害がありました。

また、福島第一原発事故で市内の農業に影響を受け特に畜産農家が自家生産している牧草を与えられない状況で苦慮されております。早期解決を切望します。

「がんばろう日本」「がんばろう岩手」を合言葉に復興に向けて努力されておりますが、私も農業委員の立場では、安全で安心して食べられる農産物を生産する農業者に対しても「がんばろう農業」と声援を願います。 (伊藤東)

農委だより編集委員会

- 編集委員長 小野寺弘行
- 副編集委員長 伊藤守人
- 編集委員 富山養喜、齋藤ゆみ
- 千葉綾雄、村上真喜雄
- 伊藤 東